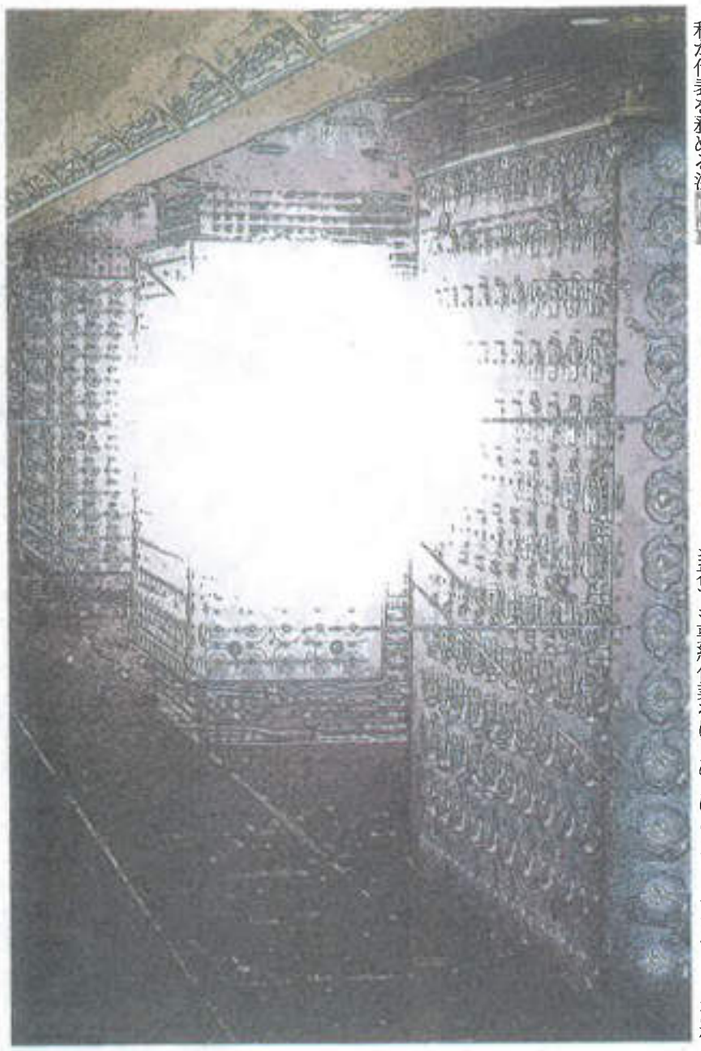
生成ＡＩは中小企業の業務を効率化できるのか

浅間商事株式会社
代表取締役社長
柳沢　太一



私が代表を務める浅間商事

Ⅰ　生成ＡＩブームの概要

・生成ＡＩとは

生成ＡＩとは「ジェネレーティブＡＩ」とも呼ばれ、大量に蓄積されたデータをもとに様々なコンテンツを生成するＡＩを指す。作りたいもののイメージを日常的に使用している言葉で入力するだけで、新しい文章や画像、動画、音声などを生み出す。近年、その知識量とレベル、スピードが飛躍的に高まったため注目されている。

・ＡＩ（人工知能）の歴史

ＡＩの歴史は古く、今日に至るまで3度のＡＩブームが起こっている。第1次は1950年第後半から60年代、第2次は80年代、第3次は2010年代。そして現在は第4次ＡＩブームに突入しているとする指摘も多い。

第3次ＡＩブームの頃、ＡＩがチェスや囲碁の王者に勝利して話題となった。当時のＡＩは盤面のような特定の領域内での活躍に限られていた。

そして2020年代、ＣｈａｔＧＰＴ（チャットジーピーティー）という非常に高性能なＡＩの公開で再びブームに火が付いた。その最新バージョンであるＧＰＴ－４は、アメリカの大学や司法試験にも合格できる知識レベルに達しているという実験結果もある。ＣｈａｔＧＰＴが22年11月に公開されてからわずか5日間で百万人、2カ月後には1億人の利用者に達したと推計され、人々の関心の高さがうかがえる。

Ⅱ　自社紹介

では、毎年2000社以上の中小企業のデジタル化支援を行う。当社自身も中小企業であるため、顧客の一歩先を行くデジタル化を目指して試行錯誤しており、生成ＡＩについてもさまざまな事を注視しながら活用を始めている。今回は当社から見た生成ＡＩと中小企業における活用について解説したい。

【プロフィル】柳沢太一＝やなぎさわ・たいち。立教大学法学部政治学科を卒業後、グロービス経営大学院ＭＢＡ修了。沖電気工業株式会社、キヤノンマーケティングジャパン株式会社を経て祖父が創業した浅間商事株式会社に入社し、２０１６年に社長就任。「中小企業のはたらき方を効率的で安心なものとする」をミッションに事業を展開。ＩＰＡセキュリティプレゼンター。

Ⅲ　生成ＡＩで何ができるか

生成ＡＩができることには業務効率化につながるものも多い。

・要約作業

「この報告書を500文字に要約」と依頼すると、数十ページの報告書を数秒で読み込んで500文字に要約してくれる。

・翻訳作業

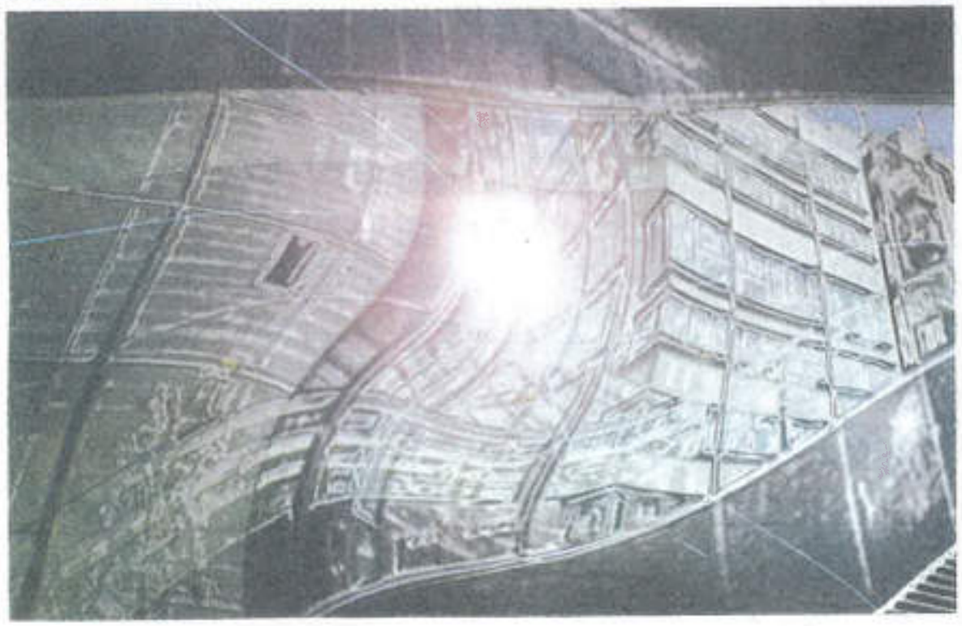
「この内容を英語と中国語に翻訳」と依頼すると翻訳してくれる。

・画像作成

「チラシ用に笑顔でパソコンを持っている会社員の画像を作成」と依頼すると、イメージに近いオリジナルの画像を生成してくれる。

・文章音声化

指定した文章をＡＩで音声化する。ナレーションに用いるなど動画制作にも役立つ。当社でも要約作業をはじめ



ラーニング動画制作などに生成ＡＩを活用している。生成物にはまだ粗い点も見られるなどテスト段階ではあるが、中小企業の業務を効率化して生産性や付加価値を高める大きな可能性を感じている。

Ⅳ　生成ＡＩの注意点

非常に便利な生成ＡＩだが、注意点もある。

・フェイク（偽）ニュース

例えば「○○の怒っている顔の画像を作成」などと生成ＡＩに指示すると、著名人の怒っている顔が容易に偽造できてしまう。このような悪用によりフェイクニュースが横行する可能性がある。

・フィッシング詐欺など

「○○銀行が顧客を勧誘するメールを日本語で作成」と指示すると世界中の誰もがそれらしいメールを偽造できる。さらにサイバー攻撃プログラムも生成可能であることが各国の検証実験で明らかになっている。フィッシング詐欺やサイバー攻撃が巧妙となり、犯罪増加につながることが懸念される。

・情報漏えい

誰でも無料で使用できる生成ＡＩサービスに社内の個人情報や営業情報を入力すると、情報が社外に漏えいする恐れがある。業務に活用する際はサービスのセキュリティや信頼度に注意したい。

・権利侵害

生成された画像や文章には、著作権や肖像権が発生する既存の作品が用いられる可能性がある。サービスによっては生成物の商用利用を認めないものもある。新しい技術ゆえに法整備が十分ではないため、知らぬ間に権利侵害とならないよう注意が必要だ。

Ⅴ　中小企業が生成ＡＩを活用するためのポイント

・ペーパーレス、データ化

ＡＩはデータを学習して賢くなるため、ペーパーレスやクラウド活用により社内情報のデータ化を進めることが初めの一歩になる。

・著名なクラウドサービスを活用

中小企業がＡＩ活用の波に乗り遅れないための最もシンプルで費用対効果の高い方法は、Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔ３６５やＡｄｏｂｅ Ｃｒｅａｔｉｖｅ Ｃｌｏｕｄなど著名なクラウドサービスを活用することだと考える。情報漏えいや生成物による権利侵害などの危険性をユーザー自身が一つ一つ見極めるのは非常に難しい。これらの信頼のクリアが期待できるサービスを使用することが望ましい。

・ＡＩをうまく使える人になる

Ｗｉｎｄｏｗｓ11にも生成ＡＩが搭載され、スタンダードになりつつある。今後ＡＩをうまく使えない人は、現在のネット検索ができない人と同じ位置付けになるかもしれない。

Ⅵ　まとめ

生成ＡＩの普及により人間の仕事がなくなるといわれることもあるが、技術や価格が実用レベルになり一般の中小企業にも浸透するにはまだ時間を要するだろう。ブームに踊らされず、しかし拒絶もせず、新しい技術を一歩ずつ学びながら段階的に取り入れていくことが中小企業にとって大切なことではないだろうか。